

杉並区における銭湯の立地と機能

丸 若 利 嘉

最近、伝統的サービス産業である銭湯が新聞などで話題を呼んでいる。その多くが従来のおめかしい銭湯のイメージから脱却し、現代風に様変わりした銭湯の姿を報じたものである。

銭湯（普通公衆浴場）の歴史は古く、東京における銭湯の発祥は今から四百年前にさかのぼる。発祥以来長年の間、銭湯は庶民の生活には欠かせない存在であり、繁栄を誇ってきた。というものがかつて庶民の住宅の多くには浴室がなかったため、入浴は銭湯に依存していたからである。しかし現在、銭湯をとりまく環境は大きく変わり、多くの住宅に自家風呂（内風呂）が備わっている。そこで今、銭湯がどのような状況下に置かれているのかという疑問が生じてくる。

この論文のフィールドである杉並区は、東京23区の西端に位置し、一般に「城西地区」と呼ばれる地域に属している。戦後、杉並区は都市化の進展とともに東京の郊外住宅地として発展をとげ、現在では土地利用の9割以上を住宅地が占めている。また人口は23区でも多い方に属し、夜間人口が多いことも住宅地としての地域的特性を示している。この論文では、このような住宅地としての杉並区の銭湯の実態を調査したうえで、現代社会において銭湯がどのように機能しているのか、そして今後銭湯が生き残るための課題は何かということについて考察する。

概して、杉並区における銭湯は、人口の多い地域に比較的多く分布している。さらに銭湯の立地環境をみると、銭湯が多く分布する地域は住宅のたてこむあまり住環境の良くない地域であり、その中には浴室のない住宅の半数以上を占める木賃アパートの集積地区もみられる。以上のことか

ら、銭湯は人口が多く住宅のたてこむ立地環境の中で成立しやすいことがわかる。

また、区内の銭湯における客層は、大きく分けて自家風呂を持つ客と持たない客の2つに分けられる。前者は精神的なゆとりや人との交流を求める中年男性や高齢者が多い。それに対し後者は入浴を銭湯にたよっている人々であり、下宿学生や独身サラリーマンを中心とする20～30代の若年層が主体である。なお客層は地域によって若干の差があり、住環境の良好な地域では自家風呂を持つ客が多く、住環境のあまり良くない地域では自家風呂を持たない客が多い。このことから、自家風呂の有無や年齢層、さらには地域によっても銭湯の客層と利用目的が異なっていることがわかる。

しかし、浴室のない住宅は区内においても年々減少する一方であり、生活上銭湯を必要とする人口が減っているのは確かである。

こうしたことから、杉並区の銭湯では現在、客数の減少に伴う売り上げの減少・後継者不足などによってその経営状態が悪化しており、最近では、廃業する銭湯が相次いでいる。しかしこれは杉並区に限らず、浴場業界全体がかかえる問題であり、銭湯が今や斜陽産業であることは否めない。

今後銭湯が生き残っていくためには、銭湯の立地環境の特性を把握したうえで利用客が銭湯に何を求めているのかを的確に読み取ることと、従来の銭湯のわくにとらわれない新しい視点を積極的に経営体勢に取り入れることが必要である。ことに最近ではこのような銭湯のイメージチェンジに成功した例もみられることから、活性化による銭湯生き残りへの道はまだ十分に残されていると言えよう。